

教師からみた子どもの「深刻なストレス」とそれへの対処困難性

神藤貴昭
(立命館大学文学部)

●問題と目的

これまで、子どものストレスに関する研究が多く行われてきた。小学生や中学生の学校ストレスの構造に関する研究、さらには、ストレスとストレス反応との関係に関する研究、ストレス過程における媒介変数としてのソーシャルサポート、ストレス対処方略の効果に関する研究等が行われてきた。これらのほとんどは、子どもの自己評価に基づく研究である。他方、子ども自身が捉えにくいストレスもあると考えられ、特に日常的に子どもたちと接する教師の視点からの、子どものストレス研究も必要である。本研究では、小中高の教師からみた子どものストレスの構造を検討する。あわせて、それらへの対処を阻むものの存在についても検討したい。

●方法

被調査者 小・中・高教員 201 名（小学校 60 名、中学校 69 名、高校 72 名）。なお、中高一貫校、特別支援学校教員の回答は分析に含んでいない。年齢は 30 代から 50 代、非管理職であった。

手続き 2011 年 8 月および 2012 年 8 月に一斉に質問紙調査（自由記述・匿名）を行った。ストレスの概念を説明した後、「子どもが感じているストレスのうちで最も深刻なものをお書きください。またそれを解決するのを妨げているものがあれば、併せてお書きください」と教示を行った。

●結果と考察

ストレスについて、被調査者からあげられた度数をカウントし、カテゴリー化を行ったところ、「友人関係」「学業」「家庭」「周囲の期待」「進路」「その他」のカテゴリーに分類できた（下記表 1 参照）。表 1 における数字は表出数（のべ数）である。なお、同一カテゴリーの中では、同一被調査者を複数カウントしていない。 χ^2 検定を行ったところ、有意であった（ $\chi^2=34.7$, $p<.001$ ）。

小学校で多かった友人関係（35 件）については、さらに下位カテゴリーに分類してみると、「気を遣う」7 件、「周りに合わせる」5 件、「学級内の位置」「周りの目を気にする」各 3 件などであった。「気を遣う」状況の解決を妨げているものとしては、「些細なことでキレる児童の存在」「友人関係でうまくいっていないことを知られたくない気持ち」等があげられた。

中学校で多かった友人関係（45 件）については、さらに下位カテゴリーに分類してみると、「友人関係全般」10 件、「周りに合わせる」7 件、「友人づくり」5 件などであった。「周りに合わせる」状況の解決を妨げているものとしては、「同調圧力」「プライド」等があげられた。

高校で多かった学業（27 件）については、さらに下位カテゴリーに分類してみると、「学力・成績不振」8 件、「学業全般」4 件、「無気力」「内容を理解できないこと」各 3 件などであった。「学力・成績不振」状況の解決を妨げているものとしては、「常に比較されていることへの危機感」「大学でしたいことがない」等があげられた。同じく多くみられた「進路」については、「進路全般」「進路に関する不安感」各 6 件、「やりたいこと・適性が分からない」「志望進路と学力のギャップ」各 4 件であった。「進路に関する不安感」という状況の解決を妨げているものとしては、経済状況のほか、「現実味のある想像が苦手であること」「キャリア教育で急がせ、成功例を与えすぎている」等があげられた。

「家庭」や「周囲の期待」といったストレスについては、従来の児童・生徒対象の調査からはとらえにくい内容もみられており、今後、詳細な検討が必要であろう。

表 あげられたストレスの数（校種別）

	友人関係	学業	家庭	周囲の期待	進路	その他	合計
小学校	35(1.9)	17(-0.7)	14(0.4)	7(1.3)	2(-3.2**)	15(-0.1)	90
中学校	45(1.4)	27(0.0)	19(0.3)	5(-0.8)	8(-2.2*)	23(0.4)	127
高校	23(-3.2**)	27(0.7)	14(-0.8)	5(-0.5)	27(5.2**)	19(-0.2)	115
合計	103	71	47	17	37	57	332

数字は度数。括弧内数字は調整済み残差（** $p<.01$, * $p<.05$ ）。